

五つのパンと二匹の魚

マルコによる福音書 6章30－44節

森島 牧人 牧師

今日与えられた聖書は、マルコ6章の中の「五千人に食べ物を与える」という小見出しのあるところです。「パンを食べた人は男が五千人であった」（マルコ6：44）と記されていますが、群衆の中には女・子供もいましたので、その数は5千人をはるかに超えるものであったと思われまゝ。そのような数の人々全員が「5つのパンと2匹の魚」で満腹し、さらに、残ったものが12の籠にいっぱいであったと、聖書は伝えています。この出来事は、私たちが持てるものを捧げる時、その小さきものは、主イエスによって、多くの人々が満たされるものになるということを、私たちに教えています。

さて、この奇跡のお話は3つの部分に分けることが出来ます。今日はその最初の部分です。主イエスの命によって宣教のために各地へ派遣されていた12人の弟子たちが戻って来て、それぞれに体験したことや成果について、主イエスに報告をします。みんなの報告を受けた後、主イエスが弟子たちに言われたのは「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」ということでした（同6：31）。行く先々で、人々に悔い改めと新しい命に生きることを教え、決断させるという弟子たちの仕事は、数々の困難を経て果たされていったものでした。そのような大仕事を終えて、さらなる使命感に燃える弟子たちに対し、主イエスが求められたのは「休息」でした。

主のために働いて行く中で必要な休息。その休息とは、祈りの刻を持つことです。祈りの中で神と会話をし、神の御心を知って、新しい命の糧をいただく。派遣先から戻った弟子たちに何よりも必要だったのは、この真の休息の時でした。さらに主イエスは、その休息の場所として「人里離れた寂しい場所」を指定されます。主が幾度も、朝早く、誰もいない寂しい所で祈られたことが聖書に記されています。寂しく荒んだ所、それは出エジプトの荒野を連想させますが、それは単に土地や場所だけを指すではありません。寂しく荒む所、それは人の心です。荒野のように荒む心……。ところがこのような寂しく荒んだ場所で、心が寂しく荒んでいる中で、人は神と出会うのです。私たちが寂しく荒んだ心を抱えてうずくまるその時、神が直接私たちに語りかけてくださるのです。主イエスも、ゲッセマネという寂しく荒んだ所での最後の祈りの中で、ご自身の受難を確認されたのでした。

主イエスの言葉に従い、神と話すために祈りの場所へ急ぐ弟子たち。そして、ヘロデ王によるバプテスマのヨハネの虐殺を受けて、自身の受難の日の迫り来ることを察知された主イエスもまた、身の安全のために、祈りのために、人里離れた場所へ急ごうとされていました。神と話さなければならない、主イエスと弟子たち。しかし、そこにはそれを妨げようとする群衆がいました。聖書記者は「多くの人々は彼らが出かけて行くのを見てそれと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て・・・深く憐み、いろいろと教え始められた。」と記しています。

この時、何よりも大切な神との対話を後に置いて、主イエスが最優先にされたのが、群衆への憐みでした。その結果、起こされることになる奇跡。ここから、主イエスは十字架に向かって、真っ直ぐに進まれることになるのです。